

鷗外漁史とは誰ぞ

森鷗外

青空文庫

福岡日日新聞の主筆猪股いのまたためじ為治君は予が親戚しんせきの郷人きょうじんである。予が九州に来てから、主筆はわざわざ我旅寓わがりよぐうを訪とわれたので、予は共に世事を談じ、また間々《まま》文学の事に及んだこともあつた。主筆は多く欧羅巴ヨオロッパの文章を読んで居て、地方の新聞記者中には実に珍しいといわねばならぬ人である。昨年彼新聞かのが六千号を刊するに至つたとき、主筆が我文を請こわれて、予は交誼うぎじよう上これに応ぜねばならぬことになつたので、乃ち我すなわをして九州の富人たらしめばという一篇を草して贈つた。その時新聞社の一記者は我文に書後のようなものを添おえて読者に紹介せられた。その語中にこの森おうがいぎよしというものは鷗外漁史だことわつてあつた。

予は当時これを読んで不思議な感なを作した。この鷗外漁史と云う称とみなえは、予の久しく自ら署したことのないところのものである。これを聞けば、ほとんど別人の名を聞くが如く、しかもその別人は同世の人のようにではなくて、却かえつて隔世の人のである。明治の時代中ある短日月の間、文章と云えば、作に露伴紅葉四迷こうそ筆ん村緑雨美妙等があつて、評に逍遙しょうよう鷗外があるなどと云つたことがある。これは筆を執る人の間で唱えたのであるが、世間のものもそれに応じて、漫みだりに予を諸才子の中に算えるようになって居た。姑しばらく今数えた人の上だけを言つて見ように、いずれも皆文を以て業として居る人々であつて、僅わずかに四迷が官吏になつて居り、逍遙が学校の教員をして居る位が格外であつた。独り予は医

者で、しかも軍医である。そこで世間で我虚名を伝うると与^{とも}に、門外の見は作と評との別をさえ模糊^{もこ}たらしめて、他は小説家だということになつた。何故に予は小説家であるか。予が書いたものの中に小説というようなものは、僅に四つ程あつて、それが皆極^{ごく}の短篇で、三四枚のものから二十枚許^{ほか}りのものに過ぎない。予がこれに費した時間も、前後通算して一週間にだに足るまい。予がもし小説家ならば、天下は小説家の多きに勝^たえぬであろう。かように一面には当時の所^{いわゆる}謂文壇が、予に実に副^{かな}わざる名声を与えて、見当違の幸福を強いたと同時に、一面には予が医学を以て相交わる人は、他は小説家だから与^{とも}に医学を談ずるには足らないと云い、予が官職を以て相對する人は、他は小説家だから重事^{たく}を托

するには足りないと言つて、暗々裡あんあんりに我進歩さまたを礙さまたげ、我成功くじを挫くじいたことは幾何いくばくということを知らない。予は実に副わざる名声を博して幸福とするものではない。予は一片誠実の心を以て學問に従事し、官事に鞅おうしやう掌しょうして居ながら、その好意と悪意とを問わず、人の我真面目しんめんもくを認めてくれないのを見るごとに、独り自ら悲しむことを禁ずることを得なかつたのである。それ故に予は次第に名を避くるといふことを勉つとめるようになった。予が久しく鵜外漁史という文字を署したことがなくて、福岡日日新聞社員にこれを拈ねんしゆつ出しゆつせられて一驚を喫したのもこれがためである。然しかるに昨年およの暮およんで、一社員はまた予をおとずれて、この新年の新刊のために何か書けと曰いうた。その時の話あえに、敢あえて注文する

ではないが、今の文壇の評を書いてくれたなら、最も嬉^{うれ}しかろうと云うことであつた。何か書けが既に重荷であるに、文壇の事を書けはいよいよむずかしい。新聞に従事して居る程の人は固^{もと}より知つて居られるであろうが、今の分業の世の中では、批評というものは一の職業であつて、能評の功を成就せんと欲するには、始終その所評の境界に接して居ねばならぬ、否身をその境界に置いて居ねばならぬものだ。文壇とは何であるか。今国内に現行している文章の作者がこれを形^{かたちづく}つて居るのであろう。予の居る所の地は、縦^{たとい}令予が同情を九州に寄することがいかに深からんも、西^{せいへ}僻^きの陬^{すう}邑^{ゆう}には違あるまい。予は僅に二三の京阪の新聞紙を読んで、国の中樞の崇^{しゅう}重^{ちゆう}しもてはやす所の文章の何人の手に成

るかうかがを窺い知るに過ぎぬので、譬たとえば簾れんを隔へてて美人を見るが如くである。新聞紙の伝つたうる所に依れば、先ず博文館の太陽が中天に君臨きんりんして、樗ちよぎゆう牛ゆうが海内文学の柄とを把とつて居る。文士の恒つねの言ことに、樗牛は我に問題を与たまうるものだことと云つて、嘖さくさく々乎ことして称して已やまないらしい。樗牛また矜きやうこう高こう自ら持もつて、我が説せつく所ところは美学上の創見なりなどと曰いわつて居る。さてその前後左右に綺羅きら星ぼしの如ごとくに居ゐんでいる人々は、遠目の事ゆえ善くは見えぬが、春陽堂の新小説の宙外、日就社の読売新聞の抱月などという際立つた性格のある頭が、肱ひじを張ひつて控ひかえて居るだけは明かに見える。此等は随分博文館の天下をも争まいかねぬ面つら魂たましいであるから、樗牛も油断することは出来まい。その外帝国文学という方面には、

堂々たる東京帝国大学の威を借つて、血氣壯な若武者達が、その数幾千万ということを知らず、入り代り立ち代り、壇に登つて伎を演じて居るようだ。これが即ち文壇だ。この文壇の人々と予とは、あるいは全く接点を闕かいでいる、あるいは些いささかの触接点があるとしても、ただ行路の人が彼往き我來る間に、忽ち相顧みてもまた我に求むる所がない。縦たといまた樗牛と予との如く、ある關係が有つても、それは言うに足らぬ事であつて、今これを人に告ぐる必要を見ない。かように今の文壇の思想の圏外に予は立つていて、予の思想の圏外に今の文壇は立つている。福岡日日新聞が予に文壇の評を書けと曰うのは、我筆舌に課するに我思想の圏外

の事を以てするのだ。予には文壇の評と云うものの書けぬことは、
 これあきらかで明あきらかであろう。そこで予は切角の請ながら、この事をば念頭
 に留とどめなかつた。然るに主筆はまた突如として来られて、是非書
 けと促される。その情極さわめて慇懃いんぎんである。好よし好し。然らば主
 筆のために強いて書こう。同じく文壇の評ではあるが、これは過
 去の文壇の評で、しかもその過去の文壇の一分子たりし鵑外漁史
 の事である。原もと主筆が予に文壇の評を求められるのは、予がか
 つて鵑外の名を以て文学の事を談じたという宿因あるが故だ。こ
 こに書くところは即ち予の懺悔ざんげで、彼宿因を了する所以ゆえんだ。人は
 社会を成す動物だ。樵夫きこりは樵夫と相交つて相語る。漁夫は漁夫と
 相交つて相語る。予は読書癖があるので、文を好む友を獲て共に

語るのをたのしみにして居た。然るに国民之友の主筆徳富猪一郎君が予
 の語る所を公衆に紹介しようと思ひ立たれて、丁度今猪股君が予
 に要求せられる通りに要求せられた。これが予が個人と語ること
 から、公衆と語ることに転じた始で、所謂いわゆる鷗外漁史はここに生
 れた。それから東京の新聞雑誌が、彼も此も予を延ひいて語らしめ
 た。予は個人に対しても、時に応じ人を得るときは、頗すこぶる饒舌しゃべ
たち性であるが、当時予はまた公衆に対して饒舌しゃべつた。新聞雑誌は初
 は予を強要して語らしめたが、後にはそう大言壮語せられては困
 るとか云つて、予の饒舌しゃべるに辟へきえき易えきした。昔むかしは者道士があつて、
じゆ呪となを称え鬼を役して灑さい掃そうせしめたそうだ。その弟子が窃ぬすみ聴きい
 てその呪おぼを記おぼえて、道士の留守うかごを伺うかごうて鬼を喚よんだ。鬼は現われ

て水を灑まき始めた。而しかるに弟子は召よぶを知つて逐おうを知らぬので、満屋皆水なるに至つて周章措おく所を知らなかつたということがある。当時の新聞雑誌はこの弟子であつた。予はこれを語るにつけても、主筆猪股君がこの原稿に接して、早く既に同じ周章をせねば好いがと懸念する。予の公衆に語る習はこれにも屈せず、予は終ついに人の己を席に延くを待たぬようになつた。自ら席を設けて公衆に語るようになつた。柵しがらみ草紙そうしと云つたのがその席だ。この柵草紙の盛時が、即ち鷗外という名の、毀誉褒貶きよほうへんの旋つむじ風かぜに翻ほ弄んろうせられて、予に実に副かなわざる偽いつわりの幸福を贈り、予に学界官途の不信任を与えた時である。その頃露伴が予に謂いうには、君は好んで人と議論を闘わして、ほとんど百戦百勝という有様であるが、

善くおよ涸ぐものは水におぼ溺れ、善く騎のるものは馬より墜おつる訣わけで、早い晩つか一の大議論家が出て、君をして一敗地に塗まみれしむるであろうと云った。この言はある意味より見れば、確に当った、否当り過ぎた位だ。時代はただ啻に一つの大議論家を出したのみではなくて、ほとんど無数の大議論家を出して止やむ時がない。即ち新文学士の諸先生がそれである。試みに帝大文学の初の数十冊を始として、同時に出た博文館の太陽以下の諸雑誌、東京の諸新聞を見たならば、鷗外と云う名に幾条の箭やが中あたつてゐるかが知れるだろう。鷗外という名はこの乱軍の間に聞こえなくなつた。鷗外漁史はここに死んだ。読者は新年の初刊を看みてここに至る時、縁起が悪いと云うかも知れない。しかし初春の狂言には曾そが我を演ずるを吉例として

ある。曾我は敵討かたきうちで、敵を討てば人死のあることを免れない。
 況いわんや鷗外漁史は一の抽象人物で、その死んだのは、児童もてあその玩んで
 いた泥つちにんぎよう孩こわが毀れたに殊ならぬのだ。予は人の葬を送つて墓
 穴に臨んだ時、遺族の少年男女の優しい手が、淨きよい赭あかつち土をぼろ
 ぼろと穴の中に翻こぼすのを見て、地下の客がいかにも軟やわらかな暖な感を
 作すであろうと思つたことがある。鷗外の墓穴には沙礫されき乱下した
 のを見る外、ほとんど軟い土を投じたのを見なかつた。ただ一つ
 いくらか手軟だと思つたのは、ほととぎすの記者が、鷗外も最早
 今まで我等に与えた程のものをば与うることを得ぬであろうと云
 つたくらいなものだ。ついでだから話すが、今の文壇というものは、
 鷗外陣亡うちじにの後に立つたものであつて、前から名の聞こえて

居た人の、猶なほその間に雑まじつて活動しているのは、ほとんど彼ほととぎすの子規のみであろう。ある人がかつて俳諧はいかいは普遍の徳があると云つたが、子規の一派の永く活動しているのは、この普遍的徳にでも基もとづいて居るものであろう。予が主筆のために説かんと約した鷗外漁史の事は此こゝに終る。しかし予は主筆に、予をして猶暫しばらく語らしめん事を願う。想うにこの文を読むものは予に對むかつて、汝は汝の分身たる鷗外の死んだのを見て、奈何いかなの觀なを作すかと問うであろう。予はただ笑止に思うに過ぎぬ。予はただここに一炷いっしゆの香ひねを拈ひつてこれを弔とするに過ぎぬ。予にしてもし彼の偽の幸福のために、別方面の種々の事業の阻礙そがいをさえ忘るるものであつたなら、予は我分身ともと与ともに情死したであらう。そうして今の

読者に語るものは幽霊であろう。幽霊は怨めしいと云つて出るものには極きまつて居る。もし東京に残つて居る鷗外の昔の敵がこの文を読んだなら、彼等はあるいは予を以て幽霊となし、我言を以て怨しいという声となすかも知れない。しかしそれは推測を誤つて居る。敵が鷗外と云う名を標ま的とにして矢を放つ最中に、予は鷗外という名を署する事を廢やめた。矢は蝟い毛もうの如く的に立つても、予は痛いとも思わなかつた。人が鷗外という影を捉とらえて騒いだ時も、その騒ぎの止んだ後も、形は故もとの如くで、我は故の我である。

ただ啻ただに故の我なるのみでは無い、予はその後も學んでいて、その進歩は破は鼈べつの行くが如きながらも、一日を過ぎれば一日の長を得て居る。予は私ひに信そずる。今この陬す邑ゆうに在つて予を見るものは、

必ずや怨^{えん}懟^{たい}不平の音の我口から出ぬを知るであろう。予は心身共に健で、この新年の如く、多少の閑情雅趣を占め得たことは、かつて書生たり留学生たりし時代より以後には、ほとんど無い。我学友はあるいは台湾に往き、あるいは欧羅巴に遊ぶ途次、わざわざ門司から舟を下りて予を訪^とうてくれる。中にはまた酔興にも東京から来て、ここに泊まつて居て共に学ぶものさえある。我官僚は初の間は虚名の先ず伝つたために、あるいは小説家を以て予を待ったこともあつたが、今は漸^{よう}くその非を悟つてくれたらしい。予と相交り相語る人は少いながら、一^{ひと}入親^{しお}しい。予はめざまし草を以て、相^{あい}更^{かわ}らず公衆に対しても語つて居る。折々はまた名を署せずに、もしくは人の知らぬ名を署して新聞紙を借ることも

ある。今予に耳を借す公衆は、不思議にも柵草紙の時代に比して大差はない。予は始から多く聴者ききてを持つては居なかつた。ただ昔と今との相違は文壇の外に居るので、新聞紙で名を弄ばれる憂が少いだけだ。莊子そうしに虚舟の譬たとへがある。今の予は何を言つても、文壇の地位を争うものでないから、誰も怒るものは無い。彼虚舟と同じである。さればと云つて、読者がもし予を以て文壇に對して耳を掩おおい目を閉じているものとなしたならば、それは大おおに錯あやつて居るのであろう。予は新聞雑誌も読む。新刊書も読む。読んで独り自ら評価して居る。ただこの評価は思想を同じゆうして居ないものの評価で、天あつぱれ晴批評と称して打出して言ことあげ挙すべきものでないばかりだ。しかし筆の走りついでだから、もう一度主筆に追お

願いねがいをして、少しくこの門外漢の評価の一端を暴露しようか。明治の聖代になってから以この還かた、分明に前人の迹あとを踏まない文章が出でたということは、後世に至つても争うものはあるまい。露伴の如きが、その作者の一人であるということも、また後人が認めるであろう。予はこれを明言すると同時に、予が恰あたかもこの時に逢うて、此かくの如き人に交ることを得た幸福を喜ぶことを明言することを辞せない。また前に挙げた紅葉等の諸家と俳諧での子規との如きは、才の長短こそあれ、その作の中には予の敬服する所のものがある。次にここに補つて置きたいのは、翻訳のみに従事していた思軒と、後おくれて製作を出した魯庵ろあんとだ。漢詩和歌の擬古の裡うちに新機軸を出したものは姑しばらく言わぬ。凡おおよそ此等の人々は、皆多

少今の文壇の創建に先だつて、生理の運命に迫られたものだ。それは丁度雑りものの賤金属せんきんぞくたる鷗外が鑄潰いつぶされたと同じ時であつた。さて今の文壇になつてからは、宙外の如き抱月の如き鏡花の如き、予はただその作のある段に多少の才思があるのを認めただばかりで、過言ながらほとんど一の完璧かんぺきをも見ない。新文学士の作に至つては、またまた過言ながら一の局部の妙をだに認めたことが無い。予は是こゝにおいて將まさに自ら予が我分身の鷗外と共に死んで、新しい時代の新しい文学を味わうことを得ないようになつたかを疑わんとするに至つた。然るにここに幸なるは、一事の我趣味の猶依然たることを証するに足るものがある。それは何であるか。予は我読書癖の旧に依るがために、歐羅巴の新しい作と評

とを読んで居る。予は近くは独逸ドイツのゲルハルト・ハウプトマンの沈鐘を読んだ。そして予はこの好尠の我を動かすことが、昔前人の好著を読んだ時と違わぬことを知った。鴟外は殺されても、予は決して死んでは居ない。予は敢て言う。希臘ギリシャ語に「エピゴノイ」ということがある。猶此に末流と云うがごとしだ。新文学士諸家も、これと袂たもとをつらつらを聯ねて文壇に立っている宙外等の諸家も、「エピゴノイ」たることを免れない。今の文壇は露伴等の時代に比すれば、末流時代の文壇だというのだ。予はこの文の局を結ぶに当つて、今の文壇の諸家が地方新聞を読むや否やは知らぬながら、遥はるかに諸家に寄語する。諸家は予などと違って、皆春秋に富んで居られるではないか。今より後に、諸家はどうぞ奮つて、予が

如き門外漢までを、大に動かすような作と評とを出して下さい。そうして予をしてかつて無礼にも諸君に末流の称を献じた失言を謝せしめて下さい。鷗外は甘んじて死んだ。予は決して鷗外の敵たる故を以て諸君を嫉にくむものではない。明治三十三年一月於小倉稿。

(明治三十三年一月)

青空文庫情報

底本：「歴史其儘と歴史離れ 森鷗外全集」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年8月22日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版森鷗外全集」筑摩書房

1971（昭和46）年4月～9月

入力：大田 一

校正：noriko saito

2005年8月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.azora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鷗外漁史とは誰ぞ

森鷗外

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>